

---

# ひゅーまん・リサイクルっ

ソラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひゅーまん・リサイクルっ

### 【Nコード】

N0795X

### 【作者名】

ソラ

### 【あらすじ】

自他共に認めるダメ少女が、ダメ人間たちを立派なヒューマン（大人）にするため奮闘するハートフル・コメディ（？）・・・のはずなのですが、はてさて、どうなることやら・・・。

## ダメ少女とバイト。時々、店長

おりかされんか  
折笠蓮華は折りたたみ式のパイプ椅子に腰かけながら、じっと正面を見つめていた。

視線の先には、後退した生え際を何とか取り繕おうとした跡が見て取れる、四十代も半ばくらいの一人の男。

従業員用の制服にでっぷりとした体を納めた外見は愛らしいと表現してもいいのだが、頑強に口を引き結び、ややタレ気味の眼を手元の書類へ向ける姿は緊迫感を伴っていて、どこか近寄りがたい。

そんな父親ほど離れた大人の男性と、業務用の平机を挟んで向かい合っている状態。

堅く張り詰めるような沈黙の 때가、周囲を流れ過ぎていく。

昔からじつとしているというのがどうにも苦手な蓮華には、この時間は実際結構な苦痛だった。

何か作業をしたり、話をしていたりするならともなく、ただ無言でひたすら次の展開を待ち続けるだけなのだ。

加えて、今は放課後の一幕。終日の勉強疲れで疲労も心地よく溜まっている。

男は初めの姿勢のまま微動だにしない。

薄ぼんやりとしてきた意識を叱咤するように、瞼にきゅっと力を入れる。

しかし効果があるのは、その一瞬。すぐに気持ちも体も弛緩する。諦めずに、もう一度。今度は大きく目を開き、瞳に力を籠めるよう

にして……。  
痛い。目がひりひりする。

そんな蓮華の苦勞も知ってか知らずか、男は尚も静寂を選び続ける。

(……眠ゆい)

頭の中にひよっこり顔を出した睡魔を誤魔化すように、蓮華は正面に据えた瞳をぐるりと部屋の中へ遊ばせた。

室内は綺麗に片付けられ、清潔感に満ちている。

白を基調としたシミ一つない壁に、整然と並べられたロッカーやサイドボードの類。

オフホワイトのタイル張りの床はピカピカに磨きあげられ、髪の毛一つ見当たらない。

正面右手に見えるパソコンと周辺機器、電話機などの置かれたテーブルも小綺麗に整理、整頓されており隙がない。

さらに視線を横にずらすと、これまた曇り一つない丹念に磨かれた出窓が目に映った。

そこからうつすらと蜂蜜色の穏やかな日差しが滑りこんであり、無地のレースのカーテンが春の風に揺れている。

「えー、折笠……これは何や。レンゲ……？ 最近の子は名前もシヤレとるな」

と、ぼそりとした関西弁が聞こえてきた。

「あー。いえいえー。レンゲじゃないですー。アタシ、レンカって言いますー」

久しぶりに耳にするような人の声に、嬉しくなつてニコニコと顔を正面へ戻す。

男はちらりと上目づかいに蓮華に視線を投じると「そりゃ、すまんかったな」と、おざなりに言い、また書類へと意識を落とす。

「折笠レンカちゃん……な。桐条高等学校きりじょうこうとうがっこうに在学中の十七歳、高校二年生……と。

指に挟んだペン先でがしがし耳元を掻きながら、男が独り言のように呟く。

「えー、得意科目は……何や、昼寝？ 苦手な科目は……早起き？ 趣味は、仮眠と睡眠と惰眠……？ 自分で自己アピールは……」  
「寝ることなら誰にも負けません（ZZZ）」って、自分アカンやん！」

顔の前の書類をばさつと振り外し、男が叫び声を上げた。

「これ、寝ること以外興味ないってことやん。人生の三分の一どころか、半分以上寝て過ごすくらいの勢いやん！ ちょ、びっくりするわ。履歴書にこんなこと書いてくる子なんて初めてやで！ ホンマ、自分何考えてるん……って、すでに寝とるやん！」

男の絶叫ツツコミが狭い部屋中にやかましくも響き渡る。

その不必要なまでに大きな音量に、すでに深淵の彼方へ沈みそうになっていた蓮華は、かろうじて意識をこちら側へ繋ぎとめた。

「……ほへー？ もう朝でしゅかー？」

「そやでー。せやから早く顔を洗って着替えてきー。ご飯冷めてま

うでー……って、どアホッ！」

テーブルに料理を並べて、にこやかに微笑みかけるジェスチャーから一転。

全身を躍動させながらの渾身のノリツツコミが男から繰り出された。

「何さすねん！ これバイトの面接中やぞー！」

「はあ……」と手の甲でぐしぐし目元を擦る蓮華へ、畳みかけるように男の野太い声が叩きつけられる。

「はあ……、やあらへんがな！ 嬢ちゃん、いったい何しにここに来とんねん！ ウチでバイトしたいから、今日ここへ面接に来たんやろ？ それなのに来て早々自らの寝つきの良さを強烈にアピールしてくるって、一体どないやねんな！」

ぜーはー肩で息をし、不意に男はハツとしたような表情を横切らせた。

気を取り直すように二、三度空咳をして改まると、どかっとならば椅子へ腰を降ろす。声のトーンを心持ち低くして続けた。

「まあ、ええわ。今はこんな調子だとしても、仕事さえ真面目にやってくれたらそれで構へん。今、店は人手不足で、猫の手も借りたいのさ事実やしな」

言って、窺うように目を細めながら蓮華の体をじろじろ見やる。

「それに、何や。こう言ったらアレかもしれんけど、嬢ちゃん、ごっつ可愛い顔しとるしな。譲ちゃんみたいなおんな子がいたら、店も華やぐっちゅもんやで」

「ほへー……。ありがと……。ごじゃまふう……」

とろけるように落ちてくる瞼を懸命に持ち上げ、頭をかくんと床に下げる。

そんな蓮華を間近に、男はため息交じりに首を左右に振ると、仕切りなおすように表情を引き締めた。

「とにかく面接続けるで。……アカン。もうこんな時間や。もうすぐ混雑のピークを迎えてまう」

袖を引き、体毛の濃い腕から覗いた腕時計に一瞬横目を流し、男はやや早口で語りだした。

「嬢ちゃんも知つての通り、ウチは牛丼屋や。牛丼言ったら、庶民の味方の代名詞。中でもウチの店は、安くて早くて旨くて、泣ける。それをモットーとしおつてな。ポリュームのある牛飯に、温かいみそ汁と郷里を思い出させるおしんこの数々。それに真心と言う極上のサービスを提供する当店は、この界隈でも屈指の繁盛店としてやらせてもらつとる」

どこか誇らしげに背もたれを軋ませ、男が饒舌に言葉を継いでいく。

「老若男女を問わず、身も心も疲れ果てたすべての日本人。いや、世界中の人々たちの懐とハートをホットにしたい。そうやって、この過酷な現代社会とともに生き抜いていきたい。オツチャンたちは、そういう想いで日々やつとるちゅうわけやな。……アカン。今めっちゃええこと言つてもうた。ちよつと自分で自分を褒めたくなつたわ。マラソンのアリモリ選手の気持ちがいほどよう分かつたわ」

上向けた顔に陶然とした表情を浮かべ、男がうんうんと頷く。

「分かるか？ 嬢ちゃん。この崇高な理念が。どや？ オツチャンのこと少しは見直したやろ？ 感動したんなら素直に感動した言うてもええんやで？」

口元を緩ませ、牛井屋店主がバイト希望の少女に言葉を投げかける。ぼへーっと唇を半開きにしたまま聞いていた当の本人は、寝ぼけ眼をぱちぱちと瞬かせた後、返答した。

「あ、しゅみましえん。ちょっと気を抜いにやら……。眠くにやつちゃって……。むにゃむにゃ。もう一回言ってもらってもいいれすきゃ。むにゃむにゃ」

「……仕方ない子やなあ。ええか？ 今度はちゃんと聞いておくんやで？ ……アカン。もうこんな時間や。もうすぐ混雑のピークを迎えてまう……。って、どアッホオウツ！！」

テンション高く声を張り上げ、びしつと蓮華に人差し指を突きつける。

「なに同じこと二回言わせとんねん！ TAKE2させとんねん！  
これ、一度で決めな意味ないやろがっ！ ボケエエツ！！」

鼓膜に痛いツツコミに表情を歪めつつ、蓮華は目元をぐしぐし擦る。

「うー……。しゅんしゃいー。むにゃむにゃ」

「いや、ごめんしゃいって、口からヨダレ出とるやん！ 一週間ぶりの獲物を前に理性を失った半獣人キャラばりにボタボタ床に垂れ

とるやん！　それが人に頭下げる態度かいな！　ていうか、さつきから何やねん。むにやむにやって！　腹立つわア。ホンマに腹立つわア。そゆとこ嫌いやわア！」

きーつと激しく地団太を踏み、やがて男は疲れたようにがっくりと全身で頂垂れた。

「……もうええ。こんなん続けてたら、なんぼ体力あっても持たんわ」

長々と嘆息し、それから男は何かを振り払うかのように両手で頬をぱしんと叩いた。

「とにかく、嬢ちゃんな。採用したる。正直、メツチャ不安やけど、背に腹は変えられんからな。明日から、この店で働いてもらう。よろしいか？」

つぶらな瞳に問いかけられ、特に深く考えることもなく、こくりと蓮華が首を傾げる。

「よっしゃ！　初めに言うておくが、牛井一筋三十年。わし、吉井久造は、例え女子供だろうと容赦はせえへんで。ウチで働くからにはビシビシいかせてもらう。覚悟しときい！」

びしいつと鼻先に人差し指が突きつけられる。

そんな熱血牛井店オーナーに、蓮華はバイト採用の報いに応じるべく、ヨダレで濡れた唇をゆっくりと開いた。

「そでしゆか。分かりましゆた……。ありがと……。じゅーましゆー。声……。幾三さん……。」

「そうそう。こんの町でえーいちばん……って、なアーンでいーやねエーんツ！ 誰が吉幾三や！ 確かにちよっと名前似とるけど、そこは絶対に間違えたらアカアアアンツ！」

ここに来てすでに何度目かのツッコミを披露し、しかも今回はよほど気に入らなかつたのか、吉井と吉幾三の違いについてあれこれと弁舌を振るう、吉井久造店長。

その光景を睡魔により歪められていく視界に収め、蓮華は人知れず『ああ、かれーぱん食べたひ』と、ぼそりと呟くのだった。

続く

## ダメ少女とバイト。時々、店長2

「……は？ 面接受かった？ マジかよ!？」

机を挟んで対面に座る少女が、驚き顔で身を乗り出した。

「うんー。よく分からないけど、受かったみたいだよー。今日から行くのー」

蓮華はクマさんが軽快にスキップしている絵柄がプリントされた弁当箱の蓋を開け、そこからベーコン&エッグのサンドイッチを手に取った。

「お、おいおい、今日から？ ていうか、大丈夫なのか？ その、バイトなんかして」

「うん。大丈夫だよー。学校終わってからだし。それに家からも近いもーん」

「いや、そういう意味じゃなくてだな。てか、向こうが……っっていう意味なんだけど……さ」

「ごによごによと歯切れ悪く少女が呟く。

言っている意味が解らず『う?』と首を傾げて反応すると、少女は曖昧に笑い、思い出したように机の弁当箱を広げにかかった。

場所は学校。時間は昼休み。

蓮華は目の前の少女とともに、いつものように教室で仲よくランチに興じていた。

ぱっちりとした瞳に、栗色の髪をセンターで分けた髪型が似合うこの彼女は、堂島胡桃《どうじまくるみ》。

蓮華とは幼稚園からの付き合いです。同時に大親友の幼馴染である。

控えめでおっとりとした性格の蓮華とは対照的に、明朗快活で活動的な女性であり、中学の頃はテニスで全国大会にも出場し、シングルで上位の成績も収めている才女だ。

現在はこの学校の生徒会の副会長を務めており、本人が意図せずとも自然と周りに人が集まるようなタイプで、その竹を割ったようなさっぱりとした性格と、絶世の容姿に憧れる生徒は数多く、校内でも先輩後輩問わず彼女のファンが大勢いるらしい。

それほど彼女は皆に慕われており、そしてそんな事実を一切鼻にかけることなく、誰に対しても公平に接するところも彼女の人気が高い所以だろう。

そんな彼女とは、蓮華は幼いころからなぜかひどく馬が合い、年齢を重ねるごとに互いにその仲を深めていった。

そして幸運にも同じ桐条高校に仲良く入学することができ、この大親友と三年間同じ学び舎で学生生活を共にすることが出来ることに蓮華自身この上ない喜びを感じている。

「バイトかあ。うーん。蓮華がバイトねえ。うーん。蓮華がバイトかー。うーん……」

難しい顔で宙を睨みつけながら、胡桃が低く唸る。

彼女とはクラスは違うのだが、昼休みになるとこうして蓮華のところまで足を運んできてくれ、いつもランチを共にしてくれている。

そんな彼女にありがたい気持ちを抱きながらも、一方で蓮華はいつも冷や冷やさせるような言動や行動を取り、幼いころより胡桃に多大な迷惑をかけ続けていることに対して密かに申し訳ない気持ちを抱いていた。

だから、これからは彼女を安心させることができるような人間になつていければいいなと思う。

そのための第一歩として、蓮華が考えたのがバイトをすることだつた。

自由で自立的な教育方針を掲げるこの学校は、生徒の自主性を重んじるためにバイトをすることは特に禁じられていない。

胡桃のように何か部活をやってみるといふことも頭を過つたのだが、やはりバイトをすることを選んだ。社会経験を積んでみることは悪くないと、以前に担任の教師が言っていたことを思い出したからだ。

今日は、そのための記念すべき一歩を踏み出す大事な日。駅前の人情牛丼店。『吉井家』。

蓮華の自分改造計画は、そこから始まるのだ。

（もう高校二年生になったんだもん。学校にも慣れてきたし、頑張ろー）

ダメな自分には、もうさよなら。

とりあえず、いつでもどこでも寝ちゃう癖だけはすぐに直さなくっちゃなー、と当面の目標を頭上に描き、蓮華は手にしたサンドイッチに、はぐつとかじりついた。

ふんわりとした食感と、噛むたびに口の中に広がるとタマゴの豊潤な甘みに、ほわわーんと頬を緩ませながらも、その内では決意に満ちた激しい闘志を燃やし続ける。

そんな、ごおごおと燃え盛る炎を宿した蓮華の瞳を覗き込み、胡桃が心配そうに眉を寄せる。

「……本当に大丈夫か？」

「任しえてくらはいい」

サンドイッチを頬張りながら、胡桃に向かってピースサイン。その様子を、不安そうに目元を細めながら見つめ、胡桃が箸の間のエビフライをぱくつと口に放り込んだ。

「まあ、実際お前の大丈夫ほど当てにはならないものはないんだけどな……。ま、でもやる前からはゴチャゴチャ言ってもしやあないか。うん。分かった。じゃ頑張れ、蓮華」

「はひ。がんばりまふ」

もふもふ口元を動かしながら敬礼する蓮華に苦笑しつつ、胡桃はエビフライの尻尾を弁当箱に戻しながら、更なる疑問を投げかけた。

「あ、でも何で急にバイトするなんて言い出したんだ？ しかも、何だっけ。えと、牛丼屋？　アーシ的に、マジでビックリなんだけどさ」

「え？　あ、えーとー。あのー。そのー。なんていいいますかー。えーとー……」

言葉に詰まる蓮華に、胡桃の表情がみるみる怪訝なものへと変化していく。

「何だよ？ あ。お前、まさかまた金に困ってるんじゃないだろうな？ ほら。以前、通販で『並行世界が見えるメガネ（ラムネ付き）』とかいう、バカ高い詐欺アイテムを買っちゃったことがあっただろ？」

言って、形のいい顎に手をやり、しばし考え込む。

「あ、それともあれか？ 確か二年くらい前に、黒づくめの変なオツサンに『これで君も透明人間』とかいう教材を勧められて、二つ返事で契約しちゃったことあったよな？ いや待てよ。お、お前、まさか……。変な書類にサインしてハンコを押しちゃったとかじゃ……。」

恵まれた美貌をさつと青ざめさせる胡桃に、蓮華は両手を振って否定する。

「違うよ、くーちゃん。確かに、昔はいっぱいばい騙されちゃったかもしれないけど、今はさすがにそんなことしないよー」

「そ、そうか？」

「うんー。あの時は色々な人を巻き込んで、迷惑かけちゃって、すぐくすくす反省したんだからー。それにアタシも、もう高校生二年生だよー。そんな子供騙しなんか引つかからないもーん」

ぷくつと頬を膨らませる蓮華に、安堵したように胡桃が肩の力を抜く。

「そ、そうだよな。いくらなんでも、お前もそこまでバカじゃないよな。ごめん。悪かったよ」

「ううん。気にしなくいいよー。……あ、それはそうと、くーちゃんコレ知ってる？ 『ミラクル・ティンカーベル』って言ってねー。これを持つてると天使さんたちが幸せをくれるんだってー。いやー。これが五万円なんてホントにいいお買い物をしたなーって……」

「いや！ お前！ 全然反省してねえし！」

制服の胸ポケットから手のひらサイズの鈴を取り出した蓮華に、すかさず胡桃の絶叫ツッコミが放たれる。

「何だよ、その胡散臭さ全開の商品は！ しかもお前、それ……。どう見てもクリスマスツリーとかに飾るただの安物のベルじゃねえか！ それが五万？ お前ホント、アホか！」

大親友の幼馴染が何を怒っているのかとんと分からず、蓮華は怪訝に首を傾げる。

「えー？ だつてコレ優れものなんだよー？ こうやってチリンチリンって鳴らすと、何とお空の上の天使さんが『チヨコール』の金色の当たり券』が出やすくなる秘密の魔法をかけてくれるんだー」

「いや、幸せつてそれかよ！ そんな超庶民的な幸福のことかよ！」

「うええ？ そんなことないよー。だつて、金色は一枚でオモチヤ缶がもらえるんだよー？ 出る確率が5%も上がるのは、やっぱり大きいよー」

「いや、たつたらパーかい！ せめてそこは百パー当たるとか、そんなんにしておけよ！」

半ばやけくそ気味に叫ぶ胡桃に、蓮華は両手を広げて首をふるふる横へ動かす。

「クーちゃん、クーちゃん。何事も百パーセントばかりを求めちゃいけないよー？ 人生は、次に何かがあるのか分からないからオモシロいんだからー」

「お前は百パーセントのバカだけだなッ！」

神妙な面持ちでイチゴ牛乳に差したストローを嚼る蓮華に、椅子から立ち上がりざま今日一番のポリウムで胡桃が絶叫した。

ややあつて、情熱的な幼馴染は溜まった疲労を押し出すように長息を漏らす。

先ほどから興味深そうにこちらを眺めている生徒たちへぎこちない笑みで「何でもないよ」と手を振り返し、脱力するようにどかっと椅子に腰を降ろした。

「ま、いいや。そんなん、今に始まったことじゃないし……。じゃ、せめてさ。すぐに寝ちまう癖だけは直せよ？ 仕事は学校とは違うんだからさ。』あうー。ごめんなしゃい〜』じゃ通用しないんだからな？」

「うん。だいじょぶだよー。それは第一目標だから。任せておいてー」

勇ましく胸を叩き、その動きに連動して二つ目のサンドイッチへ腕を伸ばす。

「ま、お前はちょっと抜けてるところあるけど、一応真正のバカッ

てわけではないからな。テストの成績もこれで結構悪くはないし。それにしても、うーん……。バイトとはいえ、蓮華が社会に出るねえ……………」

笑顔满面。はぐはぐサンドイッチを食べる蓮華へ、ちらりと胡桃の眼差しが流される。

「……………ま、そういうのもアリか」

「うん。ありありー」

えへへと胡桃に微笑みかけ、もう一度、今度はダブルでVサイン。

そんな蓮華を視界に、胡桃はほとんど吐息のような小さな声で『奇跡よ。起これ』と、ぽつりと呟いた。

続く

### 少女とバイト。時々、店長3

「はい！　じゃ、今日もご一緒にいきましょかー！　」吉井家！  
吉井家！　美味いよ！　吉井家！　吉野家！　吉田家！　いやいや  
吉井家！　吉井家！　吉井家！　吉井家一番！　吉井家！　吉井家  
！　サンマは明石家………」

吉井家の従業員である証の制服に身を包み、額に鉢巻きを締めた格好の吉井オーナーの激が飛ぶ。

その日の放課後。

人生初めてのバイトへとやって来た蓮華は、人気のない店の裏口付近でずらりと横一列に並べられた従業員たちに交じり、恒例の仕事始めの挨拶へと明け暮れていた。

視線の先では、ちょうど列の中央で向かい合うように位置取り、喉が潰れんばかりに吉井が太い声を大空へと張り上げている。  
それに続いて、吉井と同じ格好をした蓮華たち従業員一同も、同じように指揮官の言葉を怒声交じりに復唱する。

蓮華は、その列の左端で奮闘していた。

一糸乱れぬ調子で唱和する彼らに対し、一泊どころか五泊くらい遅れる勢いで声を発する蓮華だが、誰も特には気にしていないようだ。というより、余りにも周りの声が騒々しすぎて、単に自分の間延びした声がある中に呑みこまれているだけなのかもしれない。

とにもかくにも、当然のようにこの中では一番下っ端の蓮華は、先輩たちへ何とかついていこうと懸命に頑張った。  
五分後。お決まりの儀式が終了する。

それと同時に、居並んだ『選ばれし夕・夜勤メンバー』たちは休めの態勢を解除し、靴裏を鳴らして軍隊のようにびしりと直立した。それに遅れること、数秒。隣の中年サラリーマン風の男から無言の眼差し受け、始め何かと首を傾げながらもすぐにその意図を察し、同じように蓮華もくいつと背筋を伸ばす。

「はい！ みなさん、おはようございますーちゆうこととでね。今日から新人さん入りしましたんで、みんな仲ようしたってくださいー。ほんじゃ、とりあえず軽く挨拶してもらってええかな？ 嬢ちゃん」

吉井のくりくりとした瞳が蓮華を捉えるのに遅れ、従業員たちの意識も静かにそちらへ動かされた。

蓮華は「はい」と片手を挙げ、のんびりと吉井の隣まで歩き、ほつと一息ついてからくるりと従業員たちへ向き直る。

「えーと。じゃー、今から挨拶しまーす。……おい、お前らー。気合は入っているのかー」

「……は？ いや、何て？」

「この戦に負けることは、すなわち死を意味するー。分かっているか、お前らー」

「いや、嬢ちゃん？ 何言ってるん？ あの、わし挨拶しろて言うてるんやけど……」

「お前らみたいな腐ったミカンでもソコクのために命を散らせるんだー。ありがたく思えー。このブタさんやろつどもがー」

「豚さんて……ちょ、ホンマ何や。これは、一体どういことなん

「や」

予期せぬ展開に、表情に困惑を滲ませる吉井にも構わず、蓮華は続ける。

「もっかい言うぞー。このブタさんやろうどもがー。よーし。念のため、もう一回だけ言っとくぞー。このブタさんやろうどもがー。オマケに、もっかい言っとくぞー。このブタさんやろうどもがー。アンコールに応えて言っとくぞー。このブタさ……」

「いや！ ええかげんにせエヤ！」

そこで、たまらず吉井のシャウトが炸裂。

「どんだけ豚野郎言うねんな！ そもそも自分、一体何の挨拶しとんねん！」

激昂する吉井に、蓮華は下顎に人差し指をやりながら頭を傾げて問いかける。

「えー。お仕事の挨拶って、こういう風にやるんじゃないんですかー？」

「そんなわけないやろ！ どこの世界に、バイト初日から先輩方を豚やろう呼ばわりする職場があるんや！ ホンマ、自分は一体どんなだけチャレンジャーやねん！」

過呼吸気味に喘ぎ、振り切るように吉井が吠え声を繋げる。

「もうええわ！！ 今さら嬢ちゃんにーから『社会人のいろは』を

教えてるような暇はあらへん！ そんなことしても長期戦になるのは見え見えやからなア！ ……アカン！ もう時間や！ ほんじゃ、今日もみんなよろしゅうな！ ……おい、牛野うしの！

袖の下の腕時計から顔を上げるや、吉井が一人の男に振り返る。

「嬢ちゃんの教育とバックアップはお前に任せたからな。頼むでエ！」

我先にと店内に駆け出していった従業員の中で、一人残されていた三十台半ばくらいの痩身の男が、返答代わりに静かに頷いた。それから、その細面にかけられたフレームレスの眼鏡を揃えた中指と薬指で、すつと押し上げる。

優雅な動作でぼけーっと立つ蓮華へ向き直り、音もなく手を差し伸ばした。

「牛野と申します。以後、お見知り置きを。早速ですが時間がありません。すぐに店内へ。アナタにはフロントで接客を担当してもらいます」

感情を乗せずに淡々と告げる牛野と握手を交わす。そのまま挨拶の言葉を返そうと口を開きかけ、そっけなく手を解かれた。

くるつと身を翻して歩き出した牛野に続き、蓮華は早くも多少荷重を増してきた脛をぐしぐしと手の腹で擦りながら、その背中を追う。

「手洗いはちゃんと済ませましたね。では、あなたはそのまま私と共にカウンターへ参ります。歩きながらで恐縮ですが、ここで手短かにカウンター内での業務内容について簡単にご説明しましょう」

店内に戻るや、きびきびとした足取りでキッチンや冷蔵庫などが所狭しと並ぶ狭い厨房内を進んでいく牛野。

その後を一生懸命に辿る蓮華には一切目をくれることなく、すらすらとレクチャーの言葉を並びたてていく。

「カウンター業務の仕事は、お客様のご注文を取り、それをこのオーダー表に記載して、厨房の人間へオーダー内容を伝えることです。そしてお客様のお食事が終わった際には会計を行い、それから速やかに食器を下げテーブルの拭き掃除を行う、と。これが主となる仕事内容になります。どうです。簡単なことでしょう。他にもまだまだ細かい仕事は山ほどありますが、今日は初日ということで、この程度でよろしいでしょう」

それが彼の話し方なのかは分からないが、その早口言葉のような独特の口調は理解するどころか聞き取るのすら難しい。

そんな蓮華の思いも露知らず、ほとんど一息で言いきった牛野は、コンロの前で鍋に火をかけている吉井にちらりと視線を送った。目が合った吉井は彼に「OKや」と唇の動きだけで返答する。それを視界に牛野は満足そうに口元に微笑を湛えると、肩越しに蓮華を振り返った。能面のような無表情を向け

「あなたはホールの中央部だけを担当してください。他は私が引き受けますので」と言い残すと、さっさと一人客の集まるカウンターへと出て行ってしまふ。

(えーとー、ほーるの……。何だっけー)

天上を見上げ、しばらくほけーっと立ち尽くす。やがて、そんな蓮華に気付いた吉井に「何してるん？」

早く仕事行きーや」とばかりに顎で店内フロアに通ずる通路を指し示された。

蓮華は「はいー」と片手を伸ばすと、指示された通りに、とりあえずそちらへ行ってみることにする。

「はい！ しゃませー（いらっしやいませ）！！ あ、したアー（ありがとうございました）！！」

キッチンからホールへ顔を出すと、雑然としたざわめきに紛れ、一際際立つ甲高い音声が耳に飛び込んできた。

威勢のいい掛け声に誘われるように視線をやると、そこには先ほどまでのロボット然とした表情とは打って変わり、メガネの奥に満面の笑みを浮かべた牛野の姿が。

「あ、はいいい！ 少々お待ちくださいましえーんっ！ いったも、ありがとざあーんすっ！ あ、おまつたせしゅたーんっ！ あ、したアーん！ したアーん！ したたたアーん！」

まるでお手本のような完璧なる営業スマイルをお客に振り向けながら、牛野が店内を縦横無尽に躍動する。

きびきびとした動作に、情感豊かな語り口。牛野は終始ニコニコしながら揉み手を動かし、しかしさりげなく、そして油断なく周囲に注意を配りながら確実に仕事をこなしていく。

その動きはもはや神がかっており、客の「あ、すいません。注文いいですか」の『あ』の部分が音になっただけで、すぐに注文だと判断。オーダー票を片手に瞬間移動じみた速度で客の前に出現し、続く言葉を微笑交じりに悠然と待ち構えてしまうほどだ。

「ほへー」

その様子に、自然と唇からため息が漏れ出す。

「うわー。スゴいなー。牛さん。あんなに早く動けるんだー」

蓮華の視界の中では、店内の至る所に現れては消え、また現れては消える牛野の姿があった。

その常人ならざる速度によって空間には次々と薄明の残像が描かれ、それが完全に消滅する間もなく次々に新たな牛野が誕生する。

その様子を見てみると、まるで分身の術でも使っているかのようだ。

蓮華は顔全体を使い、しばらくそんな店内へと意識を無秩序に散らばらせていた。

「あの、すいません！」

棒立ちする耳に、ふいに声が届けられた。ハッと我に返り、ぱちぱちと瞬きを数度。

それから首を左右に振り、声の主と思われる正面右側に位置するボックス席の男性にようやく目を留める。

「あ、すみません。ちょっと……よ、よろしいでしょうか？」

長髪にカラフルなバンダナを巻いた男性が、控えめに片手を挙げる。

「あー。はいー」

どうやら自分を呼んでいるようだ。

蓮華はにぱつと表情を華やかせ、すぐに足先をそちらへ向ける。

真っ白なテーブルを囲んでいるのは年齢不詳の男性四人組で、インドアよりもアウトドア派といった大人しそうな容貌をしていた。

彼らは席へ近づくと蓮華を、揃って吟味するような目つきで見つめている。

「お待たせしましたー」

そんなことにも気付くことなく、男たちへ屈託なく微笑みかける。しかし、どうしたことが彼らは蓮華と目が合うや眉をぴくりと跳ね上げ、恐縮したように俯いてしまった。

「あれね。どうしたんだろー」、と小首を捻っていると、バンドナの男が先ほどまでとは微妙に変化した口調でもごもごと口を動かす。

「あ。ちゅ、注文なのですけれども。よ、よろしいでしょうか？」

「あ、はい。よろしいですー」

どこか緊張に上ずるような男の声にも、元氣よく返答。対して、男の方はほのかに上気させた顔を斜めに逸らし、軽く咳払いを一つ。分厚い唇を軽く舌先で湿らせた後、続けた。

「あ。そ、それでは自分は並に、つゆたく……。キムチをお願いします……」

「しょ、小生は……。大盛り……。ねぎたく。さらには、ギョクを頂きたい……」

「せ、拙者は、あいがけカレーでござる……」

「それがしは……。親子丼でファイナルアンサーです……」

ちらちらと上目遣いに、どこか落ち着かない様子で注文をしていく男たち。

蓮華は小声で復唱しながら、事前に渡されていたオーダー表へとペンを滑らかに動かしていく。

「……………はい。分かりましたー。お待ちくださいーいー」

やがてオーダー票から顔を外し、蓮華は男たちへ丁寧にお辞儀をした。

くると回れ右をし、注文内容を伝えるべくキッチンへと歩みを進める。

背後から「……………ふえ、フェアリー・チャイルド」と呻くような声が聞こえてきたが何の事だか分からず、それよりも『あー。何かこういうのって楽しいなー』とか思いながら蓮華はふんふんと鼻歌を交え、楽しそうに食事をするお客たちを横目に厨房へと戻っていた。

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0795x/>

---

ひゅーまん・リサイクルっ

2011年10月10日03時37分発行